2024年度研修レポート

研修員氏名：趙　方任（チョウ　ホウジン）
研修　期間：2024年4月1日～2025年3月30日
研　修　先：中国大陸（雲南大学）
　　台湾（国立台北教育大学）
研修　目的：

中国諸少数民族喫茶法の調査、記録、整理と分析研究が今回のメインの研修目的である。実は、私は近年来ずっと中国文人の喫茶文化から発展してきた、日本茶道の起源及び「茶禅一味」の本質について研究してきた。そして、今回の研修結果を以て、日常の喫茶と精神鍛錬の喫茶の相違及びその原因を明らかにすることにより、「茶禅一味」の本質を究明することができると期待している。特に、喫茶文化の分岐点である中国元代喫茶文化の影響を究明することが、「日中の茶禅一味の相違」という研究に繋がるため、これを次の科研費研究申請テーマにしたいと考えている。

また、喫茶文化をはじめ、今回研修で得た各地域の諸民族の民俗文化、生活スタイルを授業で生かして、学生の異文化理解、異文化共生共存理念を育み、比較の視野を育てることに有効活用する予定であり、また、日本における中国語教育についても研究を重ねていくつもりである。

さらに、国際センター所属の身であることから、「一年」という長い滞在時間の中で、中国との国際交流、特に留学生の誘致の可能性を探りたい所存である。

研究テーマ：

上記の研究目的に合わせて、よりよい研修成果を得るために、次のように詳細な研究テーマを設定している。

（一）　中国少数民族の喫茶法を調査する。
（二）　寺院を中心に訪問し、合わせて現地の民間信仰文化の特徴も調べ、喫茶文化の精神性と多様性を研究して、「茶禅一味」の本質を追求していく。
（三）　長く中国に滞在する利便性を利用し、現地の外国人に対する中国語教育の事情を参考に、大妻女子大学の中国語教育現状に合う中国語テキストの作成を着手する。
（四）　長く中国に滞在する利便性を利用して、大妻へ中国人留学生を誘致するスムーズかつ継続性のある方法を探る。

研修　方法：

研修目的と具体的なテーマを達成するため、今回においては研修は研究室に留まることなく、各地を訪問する方法を取った。具体的に以下の三つの研修方法である。

１、現地研究者との意見交換と情報収集は基本的に個人面談、座談会、講演の形で行う。
２、諸少数民族喫茶文化調査は基本的に家庭訪問の形で展開していく。
３、喫茶文化の精神性と多様性の研究や茶禅一味の研究は基本的に寺院、仏教関連機関、茶館などへの訪問の形で展開していく。

研修レポート：

第一段階：2024 年 4 月 1 日から 6 月 2 日までの間、台湾台中市に滞在した。

この間に（１）中台禅寺、法雲禅寺、埔里大仏など寺院を訪問；（２）「大甲鎮媽祖遶境」（巡礼）に参加：（３）台中緑度母仏教協会を訪問など、研修内容を実施した。

(1) 中台禅寺は坐禅体験や「禅七」（集中安居）を積極的に実施していて、修行の庶民への浸透にも力を入れている。しかし、あくまで寺院資源の提供というレベルに留まり、「茶禅一味」のような新しい生活スタイルの創設までにはまだ至っていない。

(2)「大甲鎮媽祖遶境」の「媽祖」は海の神様として、海に囲まれている台湾の守護神として、絶対多数の住民の信仰と崇拝を受けている。その祠は台湾各地によく見られている。媽祖信仰は中国大陸福建省などの沿海地地域で発祥し、全国に広まったオリジナルの民間信仰の神様である。つまり、「大甲鎮媽祖遶境」は民間信仰の巡礼である。

世界各地に数多くの巡礼がある。例えば、イスラム教の聖地メッカ巡礼、チベット密教の「五体投地」という礼拝しながらの巡礼、そして、日本の四国八十八か所巡礼などが有名である。

「大甲鎮媽祖遶境」巡礼は台湾人自身によると、「狂気」「クレイジー」だと評している。その理由は凡そ以下の数点である。

１，数百万人が「媽祖」とともに練り歩くこと。途中で引き上げる人もいるが、最初から最後まで十日前後ずっと一緒に歩く人も数多くいる。中には自宅の「媽祖」像を背負って一緒に巡礼する人も少なくない。

２，沿線の住民は私財を投じて、巡礼者に様々な布施を行っている。布施の品はサンドイッチ、パン、お菓子、油ご飯、果物などの食品類、水、ジュース、炭酸飲料など飲み物類、雨カバー、袋、湿布、お守り、旗類の応援道具など、実に多岐にわたる。そして、一定距離ごとに数千人が一緒に食事できる給食施設も設けられている。

３，沿線の媽祖祠だけではなく、仏教の寺、道教の宮・觀、民間信仰の祠などが椅子を出して、仮眠のスペースを提供している。まさに宗教・流派と関係なく、国民的な一大イベントになっている。

４，子供の参加者も数多くいる。この「大甲鎮媽祖遶境」に台湾人ならば人生に最低でも一度は参加すると言われている。

(3)台中緑度母仏教協会の訪問は台湾における密教への最初の考査である。

台中の研修で台湾仏教の特徴を伺うことができた。

其一、仏教を始め、台湾の宗教は庶民への信仰の提供という側面に重きを置いている。つまり、修行・成就より、「仏・神のご加護」を唱えて信仰を集めている。言うまでもなく、世界中のどの宗教にとっても、庶民への「仏・神のご加護」信仰提供は重要な構成要素、重要な仕事である。ただし、台湾の場合は「仏・神のご加護」の色だけが強く、「修行」の日常への浸透があまり見えてこない。これは「茶禅一味」理念が発展していなかった理由の一つだと考えられる。

其二、台湾の祠、寺院に儒、道、釈三教融合の色が強い。

これは中台禅寺の「伽藍殿」に、法雲禅寺の「大雄宝殿」に「関羽」の像が祭られていることで証明できる。「三教融合」は現世利益の追求を最大限に表現したいからにほかならないと思われる。

其三、台湾人は布施をよく行っている。

これは台湾寺院の新しい運営の経済基盤になっている。

なお、台中市で複数の高校と接触し、大妻への留学生誘致の可能性を探ったが、良い結果を得られなかった。

第二段階：2024 年 6 月 3 日から 8 月 30 日までの間、中国大陸に滞在した。

この間に（1）仏教寺院訪問；（2）少数民族喫茶文化調査：（3）中国語テキスト作成のための資料収集；（4）大妻へ留学生誘致の可能性を探るなどの、研修内容を実施した。

（1）昆明市を中心に、盤龍寺、圓通寺など漢民族を中心とする地域の「顕教」寺院を訪問した。6 月 22 日～26 日、吉林市及び長白山の寺及び民間信仰施設を訪問した。7 月 2 日～7 月 11 日、甘粛省南部を訪問し、密教の最も有名な教育機関である拉卜楞寺、米拉日巴仏閣などを考査した。7 月 20 日～27 日、そして 8 月 13 日～21 日、二回にわたって、大理・麗江・香格里拉を訪問し、顕教の崇聖寺、密教の松賛林寺、指雲寺、文峰寺、鶏足山などを訪問した。8 月 3 日～8 月 7 日梵浄山の諸寺院を訪問した。

諸寺院の訪問では以下の数点が主な着眼点であり、茶禅一味の本質を究明するのに重要なポイントになる。これは台湾においても共通である。

1，流派それぞれの修行の実態と目指す境地。

2，実証修行の入門法と智慧修行の重点。

3，僧侶の一日と一年。（修行者の日常）

4，寺院の経済的な構造。

5，僧侶（あるいは寺院）としての俗世間との接触。

6，寺院茶（仏茶）の有無。

7，仏法の理解と伝授。

一連の訪問により、中国の庶民の信仰されている仏教では「世俗利益追求のために修行ではなく、焼香拝仏を主として行うようになる」という現象と密教寺院の「観光化」は今の中国仏教の二大特徴だと見出せた。

そして、密教の修行方法、上師制度、悲智双運、閉関方法、ないし仏像の表現方法などについて理解を深められた。これは茶禅一味本質の研究に大いに貢献したと思う。

（２）の少数民族喫茶文化調査について、雲南省、貴州省で白族の「三道茶」文化、モンゴル族の「奶茶」文化、チベット族の「酥油茶」文化、壮族の「烤茶」文化などの資料収集を行った。甘粛省で「蓋碗茶」文化、回族の「缶缶茶」文化を考査した。

さらに、8 月 8 日～12 日、三江侗族自治区と桂林を訪れ、名高い、かつ分枝の多い「打油茶」文化を考査した。

（３）について、より洗練された中国テキストの開発（テキストの作成）に着手した。

大妻の中国語教育の現状について、以下の三つの改善点があると思われる。

１，一年目の中国語と二年目の中国語を別々の先生が担当しており、使用するテキストも別々のため、一連性を持った教育ができていない。

２，すべて間接教育法（日本語を使って中国語を教えている方法）なので、大妻生が長・短期留学に行き、直接法（授業を全部中国語で行う方法）に触れた際になかなか慣れずにショックを受けるケースも見受けられる。特に短期留学の場合、期間が短いので慣れないうちに帰国を迎えるケースも珍しくない。

これは大妻生だけの問題ではなく、ほぼすべての日本人大学生が直面している問題だと言えるかもしれない。言うまでもなく、この問題を解決しない限り、短期留学の効果は得にくくなる。

３，短期留学して帰国した大妻生に専用の中国語クラスが設けられておらず、通常の中国語授業を受けることになる。留学経験者にどう配慮するか、その留学成果をどう伸ばしていくかは大妻の中国語授業の改善点の一つになる。

上記諸改善点を踏まえて、今回海外研修期間中に、日本人向けの「直接法」による中国語教育最前線の先生たちの意見を吸収し、大妻生向けの中国語テキスト作成に着手した。このテキストを作成する際、以下の数点を心がけていた。

１，週一回の授業で、二年間の連用を前提としたテキストとする。

２，日本の各大学で使われている中国語テキストを精査し、共通の文法ポイントと単語を抽出して、これらの共通内容を本テキストの基幹とする。従って、例え一年目は別のテキストを使っても、二年目でこのテキストを使うことが可能になる。

３，文型を挙げて、その後にすぐ複数の練習を組み込む形を多用する。従って、間接法でも直接法でも学習可能となる。先生は学生のレベルに合わせて、間接法と直接法を兼用することも可能になる。

４，会話の練習を個人に合わせて拡張できる形式にする。従って、初級者の練習に用いれるのみならず、短期留学経験者が覚えた文型と単語を忘れないように会話練習のバリエーションを増やすことが可能になっている。

５，毎回の授業で授業の内容に合わせて、中国文化を紹介できるテーマを設定する。中国文化を紹介する事によって、学生の留学意欲を促進するのが目的である。

（４）吉林市教育界の知人の紹介で 6 月 27 日～7 月 1 日の間に、北華大学師範分院（日本の短期大学あるいは専門技術学校に相当する）の郭慶峰学長に複数回面談を重ね、大妻へ留学生誘致の可能性を探った。

結果として、「大妻の短大生が学部に編入する」ような形で、北華大学師範分院の学生を大妻へ誘致し、大妻国際センターで 1 年間（日本語学習)、学部で 3 年間在籍し、最終的に大妻の卒業生として世に送り出す、という構想を練り上げた。

言うまでもなく、この構想を帰国後、国際センターの所長に報告し、指示を仰ぐ。

第三段階：2024 年 8 月 31 日から 2025 年 3 月 30 日までの間、台湾に滞在し、高雄を中心に研修を展開した。

この間に（１）仏教寺院訪問を中心とする民間信仰に関する調査、及び仏法への研究と諸民間信仰の相違点の研究；（２）台湾喫茶状況の考査：（３）中国語テキスト作成の執筆と校訂；（４）収集した資料の整理、分析及び研究結果に基づいた執筆活動などの研修内容を実施した。

（１）8 月 31 日～9 月 28 日の間に、高雄の仏光山、古厳寺、正徳仏堂、超峰寺、元亨寺など、合わせて 50 余の寺院を訪問した。そして、チベット密教の台湾修行センターや駐在所、協会なども訪問した。台湾での仏法の修行より庶民向けの法会を重視する傾向や、「人間仏教」を謳い、困窮者救済をメインとする善行を重視する傾向、そして「禅定」修行の欠落という特徴を見出し、大きな収穫を得られた。さらに、顕教と密教の融合について、驚きを覚えた。

僧侶だけではなく、知識人や一般市民からも話を聞いたりして、「仏教信仰と民間生活」について考査し、資料収集した。その結果、全体的に言えば、密教を含め、庶民向けのために「現世利益」を全面的に前に出していることは台湾の風土の影響だと思われ、台湾民間信仰の特徴だとも言える。この特徴は流派融合を促進したと思われる。これは歴史が長く、伝統をしっかり守っている日本の仏教やチベット密教などと比べると、「移民仏教」の色合いが濃い。

9 月 29 日～10 月 3 日、台湾南部最大規模を誇る東港迎王の民間信仰行事を見学した。

10 月 5 日～10 日に、台東・花蓮など台湾東部を訪れ、慈済など東部の寺院を訪問した。

10 月 12 日～20 日に、マレーシアを訪れ、東南アジアの移民仏教を調査した。移民仏教

とはインド伝来の仏法の継承よりも、庶民（移民）の「死」への対応から始まったもので、ほかの民間信仰、例えばマー祖、道教、儒教、土地信仰などとの融合が特徴である。

10 月 21 日～2025 年 1 月 13 日の間に、集中して執筆活動を行ったが、その合間を縫って台湾の修行集会に顔を出したり、高雄市内の寺院及び宮・祠・堂などを回ったりして研修活動を実施した。

2025 年 1 月 14 日～16 日の間に、フィリピンのマニラを訪問し、移民色が濃い現地の仏教と喫茶状況を考査した。

1 月 17 日から帰国の 3 月 30 日までの間に、ここまでで得た「台湾仏教と喫茶の関係」に関する結論を、さらに多くのサンプルで検証するために、より多くの寺院を考査すべく、再度の台東市訪問などを含み、南投・斗六・嘉義・台南・屏東・枋寮及び高雄周辺の甲仙・六亀・旗山・林園・金獅湖などの諸地域を、「巡礼」のように 100 以上の寺院を訪問した。さらに、緑島・澎湖馬公島などの台湾の離島や、原住民の部落まで足を延ばして調査を行った。

サンプル数の面でも、地域分布的でも自分が出した結論を裏付けられたこと、そして巡礼の真意をある程度悟れたことなど、大きな収穫を得られた。

（2）台東市に行った際、東部鹿野茶区、そして各地域を巡回する際に、阿里山の諸茶区、さらに墾丁、離島、原住民地域などの喫茶状況を考査した。

台湾の茶生産の面において大きな変化は見られなかったが、喫茶の面において、添加茶（茶の湯の中に他の植物の葉や食材を入れる喫茶法）及びインスタント茶は急激な発展を遂げたと分かる。また、今回研修の主目的である仏教と喫茶の関係、特に茶禅一味研究の面において、日本鎌倉時代末期、茶道の萌芽期の状況と似ている部分が見受けられる。つまり、喫茶を修行に取り入れ、修行の手段として用いられるケースが見られるが、茶禅一味の概念がまだ芽生えていない状況である。一方、インスタント茶の発展の影響もあるだろうか、喫茶が禅定と通じるという従来の考え方は多少薄れている。

（3）2024 年 12 月までにテキストの作成を完了させた。そして、2025 年 3 月末頃、編集・校訂を完了させた。

このテキストを私が担当している大妻女子大学及び大妻中高の中国語授業で試験的に使用し、実用していく中で修正、改良を施し、3、4 年後出版する予定である。

2024 年度一年間の海外研修はとても充実したものであった。研修結果を下記のように、順次発表する予定である：

『茶禅一味の本質』（中国語版）を一冊の本に仕上げ、ウェブ公開する予定である。

『仏教と喫茶文化』（日本語版）をメールマガジン「オルタ広場」で順次連載する。

『圓覚経』の日本語翻訳や「台湾民間信仰の考査」なども執筆する予定である。